

いま、子どもたちは

「今どき」の親、「今どき」の子ども

伊藤 亜矢子

「今どきの子ども」という表現には、どうしてもなじみません。子ども達を見ていると、いつも外からの刺激をみずみずしく吸収しながら成長していく存在に映り、今もいつも変わらないように感じます。楽しければ笑い、悲しければ泣く。辛い思いをすれば自信を失うし、自尊心が傷つくこともある。周囲との関係の中で、自分なりの処し方を身につけ、自己を形成していく。乳幼児はもち

ろん、小学生でも中学生でも、子どもの純粹さと人がつくられていくプロセスはいつの時代も同じように思えます。

それでも我が身を振り返れば、確かに「今どきの」母親だとつくづく思います。流行のファッションナブルな母親でもないし、お受験ママでもありません。それでも、ああ今どきの母親だなあと思うのです。

多忙な大学での校務や講義、自分の研究、学生の研究指導、原稿書き。いくらでもすることのあ
る毎日です。帰宅しても、書きかけの論文や原稿
のことは頭から離れません。ご飯をよそいながら
章立てを考え、歯を磨きながら次の会議や研究の
ことを考える。そんなことで頭はいつもいっぱい

です。ふと気づけば、二歳の我が子が足元でわめい
ています。でも「車は急に止まらない」。フル回
転している思考にブレーキをかけ、我が子の言葉
に頭を切り換えるには数秒かかります。子どもの
叫んでいることの意味が飲み込めるまで、娘はい
つも四、五回は同じことをわめいているよう
です。無意識のうちに、「ああ、お水をこぼしたの
ね」といい加減にオウム返しに返答をしつつ、娘
の言葉は右から左へ抜けていく。「えっ?」「今お
水こぼしたっていった?」「あれ?」と気づいた
時は後の祭り。びちょびちょになってお腹を出し

ている娘にやれやれ。そんなことばかりなので、
娘はいつでも人一倍の大声で、必要以上にけたた
ましく要求を繰り返します。言語表現が巧みにな
った最近では、「キイテナイネエ」などとシビ
アなコメントを呟いたりしています。

昔の母親のイメージといえば、夜なべをして手
袋編んでくれるお母さんでしょうか。睡眠を削
り、自分のことは二の次三の次にして、しっかりと
と航空母艦のように子ども達に必要なことをして
くれる。次の時代を生きる子ども達を舞台裏で
しっかりと見つめ、子ども達のできないことを
淡々と、黙々としてくれるお母さん。そんなイ
メージがあります。

けれど我が身を振り返れ
ば、いつまでたつても自分
の都合優先です。もちろん
社会人として仕事の責任も



あります。加えて、愛着ある研究も手放せません。学生やクライエントも待たなしです。子どもにとつての今が今しかないように、私と私の研究にとつても、それ以上にクライエントや学生にとつても、今は今しかないのです。

自己主張の強い娘に、「主張したいことがあるのはいいことですよ」「今は、何でも親が先回りして、何を主張して良いかも分からない受け身の子が多いのですから」と保育園の先生は慰めてくださいます。けれど内心、何の慰めにもなりません。娘の主張の「連呼」は、いつも仕事優先でうわの空の母親がつくりあげている行動に他ならないからです。

「何を主張して良いかも分からない子」と「必要以上に主張する」娘。考えてみるまでもなく、結局は同源に思われます。前者は、子どもの要求を待てない親の事情や都合があり、子ども抜きで物

事が進んでしまう。後者は、子どもの要求どころではない母親が、母親の都合優先でどこかへ行ってしまうので必死にわめく。子どもが二の次なのは同じです。

子どもの行動は素直です。娘も、孫かわいさに精一杯遊んでくれる祖母がいると、母親には目もくれません。もうニコニコ顔でキヤッキヤと祖母と遊んでいます。保育園でも遊びが長続きしないと言われがちな我が子が、こんな風に遊びに熱中しはしゃぐこともあるのかと驚き、焦りと嫉妬を感じます。負けずにたまには遊んでやろうとしても、どうせ片手間と思われているらしく、すっかり遊んでももらえません。まったく情けない母親です。少しでも一人で遊んでくれればこれ幸いと家事や仕事を片づけ、寝る前の読み聞かせも、一分一秒でも早く寝てほしいと願う毎日です。そうしたその場のぎの育児に二年間もさらされてきた娘

は、とうてい母の遊びは信じるに足りず、いつも全力投球の祖母には及ばないと固い判断を下しているのでしょうか。

とにかく一分でも仕事や家事をとというのが私の社会適応なら、そんな母親には期待せずさっさと一人遊びで満足し、そこで満たせぬ欲求は、遊んでくれる祖母との間で満たすのが娘の必死の適応です。その証拠に、祖母と過ごした日の夜は、本当に満たされ、満足そうな表情です。二年の月日はあまりに長く、たった二歳であっても自分の置かれた養育環境にしっかりと適応し、すでに娘の周囲との関係のとり方を身につけていることが分かります。

このように、「今どきの子」がいるとしたら、それは「今どき」の親の鏡映であり、親を中心としたその子の置かれた養育環境への適応なのだろうと思います。当然のことですが、母親自身を取り巻

く環境も含めて、「今どき」の世の中と、そこに生きる大人達の行動そのものが、子ども達の姿の背景に見え隠れしているように思えてなりません。

確かなものがない時代。リストラや日本経済の不透明に象徴されるように、これまでの当たり前が通用しない時代。食物汚染など物質面での生活背景も含めて、大人自身が自覚のないままに、前例のない「今どき」に翻弄されながら生きているように感じます。

けれどそんな社会を変えることが難しいように、家庭を変えることも、何十年か生きてきて「今どき」を必死で生きた親を変えることも、相対に困難なことです。変われないのはお互いさまで、あれが悪いこれが悪いと言ってもきりがありません。

ただひとつ、こうした子ども達の背景にあるさまざまな環境を視野にいれて子どもを理解するこ

とは、とても大切なことのように思えます。

やかましいほど声が大きく、絵本も一ページ毎に「読んで！読んで！」とけたたましく要求し、それでいて、あれやこれやと落ち着き無く自分のペースをつかめない。そんな娘の行動が、うわの空で相手する親のペースに翻弄される毎日の結果であるように、どの子にも、子どもには子どもの事情がきつとあるのではないのでしょうか。

親子関係や教師—子ども関係も含む、広い意味での環境が子どもをつくり、環境と子どもの不適合が問題を発生させる。コミュニティ心理学や学校臨床心理学の分野では、そのような「環境と人とのマッチング」という考え方が重視されます。

例えば、のんびりとゆったりした時間の流れの中で育ってきて、自分の中に流れる時間の流れで動く子どもは、園での沢山の子とも達で一緒に一斉に何かをする状況や定められた時間内に何かを



する状況に、なかなか馴染めないかもしれません。これは、その子の持ち味と園の環境とのミスマッチともいえます。集団で一斉にという志向が強い場面であればあるほどミスマッチは高まります。社会性のない子として問題視されるかもしれませんが、けれど逆に、一斉での課題の少ない場面であれば、ミスマッチは目立たず、問題のある子として事例化せずにもすむかもしれません。同様に、うわの空の母親に振り回されている我が子であれば、集団でのあわただしいスケジュールには案外適応できても、むしろ家庭よりもゆったりしたじっくり何か取り組める時間に出会った時に、

そわそわと落ち着きのない行動が目立つかもしれません。

こうして子どもが慣れ親しんだ家庭環境と園での環境の違いが、子どもの「問題行動」を顕在化させる場合もしばしばあります。問題行動を呈する一人の子どものために環境を大きく変化することは難しいことですが、場面の工夫や、よりマッチした環境への移行などによって、その子の持ち味が生かされる可能性もあります。

うわの空の親も、一日一回何分間かは親がまともに相手をしてやる工夫をする。要求行動を押さえるのではなく、応答性の高い対応を周囲も行なう。一斉での課題の少ない場面をもうける工夫をする。そんな風に、園と親との協力で実行可能な小さな工夫は沢山あるかもしれません。そうした工夫は確実に子どもの行動を変化させます。行動の背景にある環境要因を少しでも変化させれば、

子どもの行動は自ずと変わるからです。

もちろん我が身を考えれば、現実にはそれがどんなに難しいか明らかです。けれども、すぐにできることはなくとも、子どもの行動とその背景にある環境との関係を理解することで、子どもの行動の意味が明らかになり、それを受け入れやすくなったり、対応に余裕が生まれたりするように思います。

「今どき」の環境が子どもをつくり、周囲の変化が子どもの行動を変化させていく。

しなやかな身体に象徴されるように、子どもの吸収力と変化成長する力は無限です。園や家庭で、小さな工夫が発見され、誰かが少しだけ実行すること。不埒な母親としては、身の恥をさらし自分を棚に上げてのお話で恥ずかしい限りですが、そうした力の大きさを学校現場での心理臨床実践を通して痛感します。

(お茶の水女子大学)